

# 『ピレネー犬の動物文化学Ⅱ』

LIBRARY ICHIKO 138 SPRING 2018 4月30日 発売予定

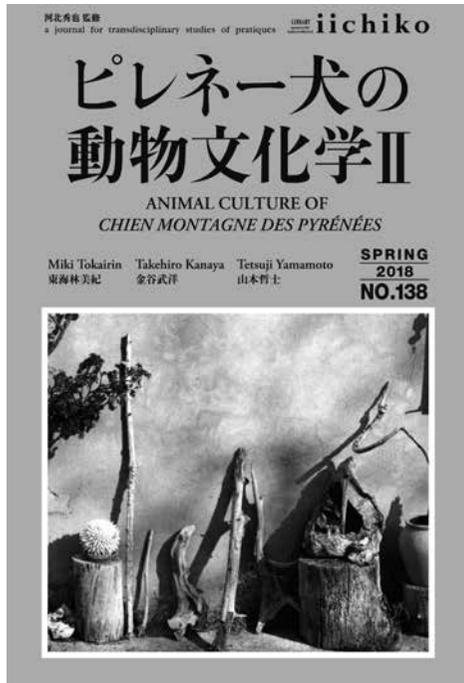
今回は、ピレネー犬に関わる「人たち」の方へ焦点をおいた。(1)(2)合わせてのドキエメント写真である。動物や植物、さらに菌類まで、また宇宙まで含めて、科学的検証が多々進められているが、哲学や社会科学・人文科学が、あまりに遅れているのも、実際世界を見られなくなっているためである。一方、情報技術が、機械技術の思考「延長」のままなされているにどまっっている。地球として存在していたことの本質が、つまり、現生人類が存在していることの存立根拠が、逆に、見えなくなっているために、「危機」が、自然災害や火山爆発などに出現している出来事の中で、身近に感じられ初めている。他方に、安穏とした消費生活の頂点にいたっているような安楽世界がおとずれもいる。

だが、動物から見て、その存在圏域が危うくなっているながらも、彼らの本質は、数千年、いや数万年のヒトとの共存や競争の中で変わっていない。それをも変えるほどの変動がきているのかもしれないが、その時は人類の存在の危機を伴うことは、動物史を見ていけば感知されることもある。

この考えを探っていく中で、イヌとヒトとの共存が、現生人類の生存にとって関係本質であることが検証されている事ごとが示唆されてきた。「わたし」として、目の前の犬の挙動とこちらとの関係の共存を覗いて、どうしても語られえないことがあまりに多いことから、一つの自分への明証化として、ピレネー犬のルーツを「探る」手法をとってみたいのだが、それは個人趣味のことではなく、ネアンデルタール人の絶滅の、類の問題にまで至るようになった。一体、なぜ現生人類「ホモ・サピエンス」は、過酷な環境を生き延びて、かくも巨大な人為的世界を作り上げてきているのかだが、その理性や知性の賢さは、動物や植物の賢さに優っているとは言い難いものがあり、しかも、未だ家畜化された動物に依拠し、犬や猫などを「愛でて」続けるのか、そこで何を人類は原初で享受したのか、その原初を忘却してしまっただけから、どこで道を誤ってしまったのかということだ。現生人類「ヒト」はイヌと協働関係を結ぶことで、イヌとの共存を図れなかったネアンデルタール人が絶滅しようとも、生き延びてきた、という見解はただの仮説とは思えない関心にあって、「述語制」の言語問題は、生命環境の本質問題にまで不可避に及ぶことになっているのだが、動物哲学は、そこに未踏の問題をこちらへ突きつけてくる。自然哲学、近代哲学では解消できない関心、しかし、人類「ヒト」の智慧と情動として、実際に果たしてきたこととしてある。特集内で紹介されるGerald氏の存在は、その本質の存在ではないだろうか。次のしるべき機会には「植物」について考察を進めてみたい。そのとき、動物・植物で、こだわっていくことはあくまで述語的な「直接性」である、実体ではない「関係の生存」である。

▼東海林美紀「ピレネー山脈の放牧文化とピレネー犬」  
▼山本哲士「動物哲学と動物の文化学へ2」  
▼金谷武洋「連載6」述語制の視点が解明できる印欧語中動相の機能」  
▼カラー特集「日本のピレネー犬」

「LIBRARY ICHIKO」は季刊誌です。次号は二〇一八年七月末発行予定



A5 変形 128頁 定価(本体 1,500円+税)

【監修・アートディレクター】  
河北秀也(かわきた ひでや)  
1947年生まれ。  
日本ペリエールアートセンター主宰。  
著書に『デザイン原論』など。  
本誌プロデューサー、アート・ディレクター。

【編集・ディレクター】  
山本哲士(やまもと てつじ)  
1948年生まれ。  
政治社会学、ホスピタリティ環境学。  
主な著書に、『ミシェル・フーコーの思考体系』、『ホスピタリティ講義』、『国つ神論』、『くもの日本心性』、『高倉健・藤純子の任侠映画と日本情念』、『フーコー国家論』ほか多数。

ご注文は「R」の「C」へ ↓ Fax. 03-3294-2177

文化科学高等研究院出版局 tel.03-3580-7784 fax.03-5730-6084

ピレネー犬の動物文化学Ⅱ

LIBRARY ICHIKO 138 SPRING 2018 1500円(税別)

ISBN 978-4-938710-34-7 C1010 ¥1500円

書店名

部数

冊

文化科学高等研究院出版局

Email: ehesc@gol.com

ehescbook.com